

Principal Correspondence

刷り込まれた遺伝子

現代と二百万年前の石器時代の人間の遺伝子は、ほぼ同じだといわれます。

例えば、当時からずっと自然に発達することが遺伝子に刷り込まれていた知能に、言語があります。言語の能力には「聞く」「話す」「読む」「書く」の四つのカテゴリーがあります。

「聞く」「話す」

「聞く」「話す」だけは普通に育てば自然に身につけてきます。

生まれた赤ちゃんに親や周りの大人や兄弟姉妹が話しかけ、自然に覚えていくのですが、この能力の獲得には臨界期があり、4～5歳まで話しかけもない環境に育つと、そこで脳の扉は閉じてしまい、言葉の能力は失われます。まれな例ですがフランスの森で見つかった推定10歳を超えた野生児ヴィクトールは言語がしゃべれず、聞いても理解できなかったといえます。インドでは狼に育てられていた姉妹の、大きい方の子(推定8歳)の言語能力は、その後数年かけても45語以上伸びなかったといわれます。

「読む」「書く」

これに比べて「読む」「書く」ということは文字が生まれて高々6千年ぐらいですから、遺伝子に自然に覚えるような書き込みになっておらず、勉強して覚えなければなりません(聞く・話すができることが前提ですが)、極端な話、何歳からはじめても能力が伸びていきます。ただしIQの扉が閉じる8歳までが特に記憶力が伸びる時期なので効果的です(今から、アラビア語を勉強すると思ってください。努力すれば今からでも読み書きはできますが、幼少期ならたった一年でも、相当な進歩を示すでしょう)。

同じく自然に発達する遺伝子に、小さな子は年の近い大きな子にすぐなつき、大きな子は年の小さい子の面倒を見ることで喜びを感じるという能力があります。

これは旧石器時代の人々は部族の集落で暮らしており、狩猟や採取生活が忙しい両親に代わって、兄弟姉妹、いとこや子どもたちが一日の長い時間一緒に過ごしていた事から刷り込まれたものと推定されます。まさにここが、子どもの社会性の原点で、思いやりや共感する力、相手の感情を読む力、規範を守ること、助け合うなどの人間性知能が獲得されることになります。十分に伸ばさないと、勉強ができて大きくなくて、場や空気が読めない、仲間を受け入れられない、社会に適應できない人になってしまいます。この能力の臨界期は8～9歳といわれ、まさに今、低学年の子どもたちの環境です。



Principal Correspondence

生活習慣を正しく

夏は子どもの季節・勉強では育成できない知能が育ちます

脳の活性化の話です。人の脳が活性化した状態とは、どういう状態を言うと思いますか？「さわやかだ？」「興奮していてさえている？」「活発に活動している？」いろいろ考えられると思いますが、脳が活性化している状況とは一口に「脳に血流量が増加することを言います。」血流量が増加することで代謝量が活性化し前頭連合野が働きます。



朝、ご飯を食べてこない子は(ほとんどは親が食事を食べさせないような悪い環境にあるのではなく)子どもが夜遅くまで起きており、朝ぎりぎりまで寝せているために、食欲がなくて食べないことが多いのです。脳に唯一の栄養分の糖が補給されず、寝不足だったりすると午前中「ぼーっ」と過ごしたり「不機嫌」だったり、授業に集中ができません。これを3年、4年と積み重ねれば、たったこれだけで知能には大きな差がつきます。大体、人の能力の基礎・器が出来上がる臨界期(おおむね9~10歳)を迎えてからでは遅いのです。

私の友人で、水戸一高の折、一回授業を受けるだけですべて頭に入ってしまう人がおりました。私と一緒に遊んでいたのに塾もいかず東大に合格しました。こういう人を脳の器が大きい人といい、知能が高く、瞬時に頭を活性化する癖(つまり集中力)をつけたのだと思います。

夏休みは生活が乱れがちですが、しっかりと規則正しく睡眠、食事(脳の栄養)を取るだけでIQは上がります。

さらに夏休みは普段できない活動、様々なイベントがあります。

脳の発達のためには「わーっ」「どきどき」「わくわく」「ふしぎだ~」「かわいそう」「じわ~」というような「感動体験」が必要といわれています。いわゆる「夜空を仰ぎ満天の星を見た経験」「自分でご飯を炊いた経験」「虫を捕まえた経験」「博物館や図書館に行った経験」を持っている子どもの方が、知能が高いというデータがあります。

感動が脳を育むのです。

夏は子どもの季節。夏休みは、しっかり宿題をしながら感動あふれた体験活動を積んで参りましょう。

